

研究通信

第90

1973年12月刊
村落社会研究会
事務局

中央大学
文学部社会学研究室

志摩・合歓の郷大会に参加して

中村正夫（九州大学）

十一月のなかば、事務局より志摩・合歓の郷大会の印象を書くように、との要請があった。そのときは、村研にはかねてお世話のなかり放しなので、応諾の旨を折返し返事しておいた。ところがいざとなると、予期していなかったことだけになんの拠り所もなく、浮んでくるのは断片的な想いばかり。とかくの駄弁を弄するばかりで、ろくなしろものにはなりそうもない。せっかくの機会を与えていただいた事務局に、かえってご迷惑をかける結果となってしまった。

とはいうものの、私じしん合歓の郷大会にはかなり積極的な気持ちのぞんだ。が正直なところ、本年度の共通課題に特別の関心があったから、というわけではない。いささか不謹慎な言草だとは思いますが、ご勘弁願いたい。実情はこのようなことである。

前年度の千葉・鴨川大会での総会場で、いち早く本年度開催地の

目安がつき、場所は志摩地方、設営はこの地方をフィールドとしてすでに多大の研究成果をあげられた愛知大学の担当と決定したとき、すでに参加を決意していた。鴨川大会の前は、そうはいかなかった。むしろ返り新参のそれにも似た逡巡さえ感じていた。もともと大会参加はこんどを加えても通算四回、従来とてけっして積極的な会員とはいえなかった。でも私にとって村研が準拠枠としてもつ比重はかなり大きい。この内なる意識と現実に参加しなかった（—できなかつた）ことの間ギャップ、それは多かれ少なかれ客観情勢のしからしむるところ。阻まれてきた出足がどうやら解かれはじめたのが昨年からで、足どりもたどたどしかつたというものである。

しかし鴨川大会に出席してみても、いちおうの瀬踏みがすんだという身軽さ、それに私にとって伊勢・志摩は処女地、よかれあしかれパール・ラインと愛称されるようになったこの地方の水先き案内は、余人を許さぬ愛知大学。いってみればそうした魅力であった。

大会前日の早朝、新大阪駅着。大阪で数時間、知人との逢瀬をすこして午後二時過ぎの近鉄特急で綿方へ。始発の難波から偶然原宏会員と乗り合せ、車中の快談を楽しむうちにも伊勢路にかかるや、窓外の秋空には、めったに見られない巻雲、巻積雲（いわし雲）の見事なひろがりがあった。—約三十年來、雲を観る習性をもつ私にとっては、この爽快なカムロ・シーラスは志摩大会が用意してくれたかっこうの舞台装置のように思えた。

鳥羽を過ぎてから特急は頻りに停車して鈍行をみ。さかんに不平をならす隣席の青年に和したのがきっかけで、四方山話がはじまっ

た。聴けば土地の人で真珠の加工技術者であった。万博に際して近鉄の志摩鉄道買収乗入れ、いまのところ赤字覚悟の先行投資だが、ホテル建設をはじめ近鉄の観光開発に寄せている関心は只事ではなからしい。それをうける地元では、伊勢湾台風をおいかけてのナリ津波からようやく立直りかけた真珠養殖加工業者が、さきのドルショックに廃業倒産を余儀されたところに、逆に昨今の輸出好調にただ指をくわえて傍観しているほかないとか。しかし志摩の漁業はいぜん活況を呈し、伊勢えび解禁、干魚製造のシーズン到来にわく志摩漁村の現状など、思わぬ話題の展開にしばし時を忘れた。

鷓方着は一時間近い延着。すでに日暮れ。駅前で同じ列車で到着した松本通商会員と出合い、三人タクシーに同乗、やがてホテル合歓に着いた。夜目には、あとで知ったような合歓の郷の景観はわからない。受付をすませて割当ての部屋にはいると、そこはベットのルームである。夕食は食堂でのセルフ・サービス、酒気ぬきとあって当てはずれ。「志摩」に泡いたイメージは中途からしだいにあやしくなってくる。ときに消息通の話で、合歓の郷は日本楽器が最近開発した保養地であり、このホテルは主として系列下にある全国の音楽教室に配属される教師やその卵の研修に利用される施設らしいことがわかった。げんにそれらしい若い女性が溢れていて、野暮な私など場違いの感じ。

しかし、それとてわれわれの懐具合を勘案されての愛知大学の格別の配慮によるものとわかってみれば、これもまた大いに興趣のわくところでもある。そればかりでなく、辛党の多い村研メンバーの

心中をさき取りされてか、川越淳二会員ほかの愛知大学関係者によって禁断の和洋銘酒があらかじめ部屋に持ち込まれていた。後続の会員諸氏の顔触れがあらかた出揃ったところで、それを供されたときにはすでにあきらめていただけに有難かった。

前夜の眠り薬のおかげで、心地よい寝覚めを迎えた翌朝は大会第一日目。ホテルからほど隔たミュージックキャンプの本部内に研究会場が設けられていた。ここまでくると、もう無用の饒舌は終らなければならぬ。

二日間にわたる研究会は自由報告四、課題報告四、そのあと三時間余の共同討議がスケジュール化されていたわけだが、村研で定形化されたこの編成は、本年度もさしたる問題を残さなかったのではないだろうか。私など共通課題によって大いに現時的問題関心を喚起される。それはそれとして貴重であり、設定された課題がそのままその時点での農業・農村のおかれてきた問題状況を反映してきたという実績がある。だが、なお独自の特殊領域にかかわっているものにとつては、自由報告の枠があることで、ヴァライエティのあるモノグラフに接することができるし、みずからもまた報告の機をうかがうよすがにもなる。まして、今回のように自由報告を通じて共同討議に付することができればあいも有り得るであろう。

共同課題「現段階における都市と農村の対立の諸形態」。共同討議にさき立って意見宿題委員より経過説明。そこで述べられたように、各報告は三回の研究会の積み重ねによって選ばれたもの――まず時期的に大きく戦前と戦後現時点にわけられた対立の諸形態V

そのものである。前者は早くから通信に予告して本課題を強力に推進した岩本報告。つまり(1)日本資本主義の成立過程において資本が農村・農業をどう利用(？)したか、その具体例としての長野県下における製糸業の発展と労働力の徴発をめぐる問題が提起された。後者は内容的に三つの形態——(2)従来議論の批判的継承をおこなうという立場からの一般化(用意された具体的分析は割愛)、すなわち日本資本主義発達過程における小農民的経営の歴史的段階的な性格規定の上に立って現段階のそれを位置づけようとした東報告、(3)危機に直面している日本農業、なかんずく自作農的土地所有、小経営それ自体の存否を問ひかけながら、新潟県下の先進的な水稲作地帯における新しい対応形態としての請負耕作を成立させたメカニズムを分析した多々良報告、(4)戦後資本主義がナショナル・プロジェクトとして推進した鹿島開発による新都市形成が、既存の農業、農村に与えた外圧とそれに対する対応をとりあげた安原・吉沢報告が続いた。

これら諸報告をめぐる私なりの受けとめ方については、もはや触れる余地はなく、またその必要もないであろう。あえて全体的な感想をいえば、△対立▽は資本対農業のそれとして多く論じられたが、それがそのまま都市対農村の問題を意味するのだろうか、という釈然なさである。それは共同討議の司会、安孫子会員がいみじくも柱として投げかけた、日本資本主義下における「家」ないし「村」、その主体的条件はどうなっているのか、という問題に通ずる。村研の目玉ともいえるべきこのテーマに、はからずもふたたび回帰した感

がないでもない。いぜん未解決、というより新しい問題性をはらむ問題として、それを解明するためには、もっともっと多くの事例についての具体的な分析を用意しなければならぬであろう。そうした感懐のかけで、従来西日本の事例を提供することの少なかつた私じしんの怠慢に対する反省があったこともつけ加えておかねばならない。

共同討議ではしかし、もっぱら聴き役にまわるしかなかった私。まだわれながら及び腰のもどかしさを感じながらも、志摩・合歓の郷大会はこうして私に返るべき目標を示してくれたように思われる。村研の宿舎がベッド・ルーム、ホステル合歓は今後における村研大会のイメージ・チェンジを象徴するのではないかと懸念する向きもあった。が私には、さきの共同討議からしても、そうは思えない。さらにその傍証としても最後に付きのことを付言しておきたい。

大会終了後、私は早々にホステルを脱出することにし、この地域に詳しい川越・阪井両会員に適当な宿の斡旋をたのんだ。紹介されたのが浜島港にのぞむ旅館「紀文」である。推せんの辞にたがわず、気風のいいおかみの接待に飽食するほどの志摩の珍味、しかも格安であった(後日訪問される方のためにあえて記す)。翌朝フェリーで御座に渡り、先志摩を縦走しての迂回の帰路は、やはり予想したとおり志摩の旅情を満喫させてくれたのであった。前事務局ならびに愛知大学関係者諸氏に対して、ここにあえて謝意を述べさせていただきます。

昭和四九年度大会の共通課題をめぐって

第一回合同委員会でおこなわれた共通課題をめぐる討議の概要は、委員会記録の中で御紹介しておきましたが、当日の討議をふまえて宿題委員会で検討することになっておりました。十二月七日おこなわれた第二回合同委員会において、蓮見委員より「昭和四九年度大会の共通課題についての提案」があり、熱心な討議がおこなわれました。そこで、宿題委員会の提案と合同委員会で討議された問題点を整理してお知らせし、会員の積極的な御意見をいただき、共通課題をより内実のあるものとして参りたいと思ひます。

(一) 昭和四九年度大会の共通課題についての提案

宿題委員会

村落社会研究会では、昭和四七、四八年において「日本社会における村落と都市」というテーマの下に、二回の大会をもち、ことに四八年には、現段階における都市と農村の対立の形態と特質を明らかにすることを課題として、大会を開いた。同大会の折の運営委員会において、昭和四九年度の共通課題については、さらに一年同じテーマを継続するという案と「家」の問題をとりあげるといふ二つの案があり、これらをまとめる形で、これまでの二ヶ年の研究の発展として、資本主義と農業の問題としての都市と農村の対立が「家の変化」というレベルにおいていかに具体的にあらわれているのか

を検討することが課題とされることとなった。このテーマをさらに検討することが宿題委員会に課されることになった。

宿題委員会では、大会の終了した十月三十一日の深夜に、すでに帰京された高山委員をのぞく全員が集って会合をもち、この課題のとり扱いについて協議した。この場合、上にのべた課題の決定の経過を考えると、今年の共通課題ならびにこれまでの共通課題の流れの中に「家」の問題を設定することが重要なポイントであることと認めあった。そこで、運営委員会では四九年度に戦前段階における家の問題だけをとりあげるといふ提案もあったものではあるが、これまで村研がいづれかといえは現段階における村落の問題に焦点をあててきたこと、ことに四八年大会で現段階の都市と農村の対立の問題をとりあげ、その延長線上に四九年度の課題が考えられたことからすれば、むしろ現段階における農業・農村の問題に接続しうる形で課題を具体化することが必要であると考えられた。それが今日この問題をとりあげる意義を明らかにする所以であろう。そのような意味において、テーマは「日本資本主義と家」あるいは「日本資本主義の形成・発展にともなう農民の家の変質過程」ということになる。そして、日本資本主義の各段階における家の問題ととりあげることを通じて、現段階における資本主義と農業・農民とのかかわりあいの特質を明らかにすることが課題となる。

したがって、大会では、三つの課題報告を予定する。すなわち、① 日本資本主義の形成ないし確立の過程における農民の家とその変化

② 戦前の資本主義の下でのA型の解体V期として、ファシズム体制への移行期における農民の家とその変化。

③ 戦後資本主義の下での農民の家とその変化——ここでは

- (A) 農地改革直後の自作農におけるA家V制度の解体過程と、
(B) 現時点におけるA家VないしA家族Vの変質のいずれか一方をとりあげる。

こうした大会報告を充実させるために、準備の研究会を開くこととするが、そのうちの少くとも一回は、来年度の大会が開かれる東北地区で開催されることを希望する。研究会の主題としてはとりあえずつぎの二つが考えられよう。

① 「家」という言葉は必ずしも明確に定義されていない。その定義や家の研究方法などを検討する必要がある。村落ないし共同体との関連で家をどうとらえるのか、について。

② 大会において、日本資本主義の各段階における家の問題ととりあげるわけで、その相互の関連を明らかにすべく、総論的に、日本資本主義の形成・発展にもなり家の問題を概観しておく必要がある。そしてそれぞれの段階においていかなる問題があるのかを指摘しておくのがぞましい。

これらについて運営委員会において検討されて、さらに具体化されることを希望して、宿題委員会はその第一回の集りを終えたのである。

〔二〕「提案」をめぐる討議の主要点

(イ) 「家」という課題は前大会の共通課題の発展か。

宿題委員会は苦心して前大会の共通課題の流れの中に「家」の問題を設定して「提案」しているが、この点について、「家」を「都市と農村の対立」に結合することは困難であり、むしろ「家」をとりあげるなら「家」をとりあげる積極的意義を明らかにする必要があるという見解と、前大会の村落共同体論との関連で、具体的には岩本報告との関連で、明治期における「家」をとりあげることが必然だという見解がありました。

(ロ) 「家」をとりあげるときの問題は何か。

まず「家」をとりあげるときどういう視角から問題とすべきかが論議されました。「家」を「家制度」、「家(家族結合)」、「相続」として、あるいは就業構造という面からとりあげる立場もあり、村研としては一般に村落と家との関連に関心をおくとしても、研究会でつめる必要があるとの見解がありました。

「家」という概念自体について論議があり、たとえば、提案でいう第三期(戦後)になお「家」という概念を用いることは疑問で、ここではむしろ「家族」「世帯」とすべきではないか。また経済史で「家」を「家共同体」として把える人と私的範疇として把える人がいるが一体どう考えるべきなのか。などの論議から、この点の整理が研究会で十分行なわれるべきであるという結論になりました。

提案では三つの時期に区分しているが、これを一回の大会でやるのか、それとも戦前と戦後にわけて二ケ年でやるのかも問題の一つ

でした。第一回は第一の時期（明治期）に限定して、概念の明確化にポイントをおいて分野毎のアプローチが必要だという見解と、概念の差での論議はナンセンスであり、報告者はモノグラフを用意して、日本資本主義の重要な各時期における「家」あるいは「家族」を明らかにすべきであるとの見解も出されました。いずれにしろ研究会で論議を積重ね、大会に向けて整理する必要があることははっきりしました。

い）共通課題Ⅴを展開するために

宿題委員会の提案の中に、時期区分があり、第二の時期にA型の解体Ⅴという概念が用いられてあったのに対し、そうした概念はすでに一定の理論的立場を意味するので、そうした表現を用いず会員の意見を聞いてはどうか、の発言にみられるように、会員の自由な発想をうけとめて共通課題の設定をしたいと考えていますが、たつき合いという意味で、提案をそのまま掲載し、会員の御意見を十分に伺い、煮つめる方針です。積極的に御意見を事務局までお寄せ下さ。

第二一回村落社会研究会総会報告

一、運営委員会報告

- (イ)研究会の開催、第一回（昭四八・五・七）於私学会館、第二回（昭四八・六・九）於学士会分館、第三回（昭四八・七・七）於学士会館。

(ロ)合同委員会の開催、第一回（昭四七・一〇・一二）於大会会場、第二回（昭四七・一二・八）於明治学院大学、第三回

（昭四八・二・五）於同上、第四回（昭四八・五・七）於私学会館、第五回（昭四八・六・九）於学士会分館、第六回

（昭四八・七・七）於学士会館、第七回（昭四八・八・二）於学士会分館、第八回（昭四八・九・六）於同上。

い）「研究通信」の発行、第八四一八九号の六号を発行。

一、会計報告

(イ)昭和四八年（一九七三年）度決算報告（別項参照）

(ロ)昭和四九年度会費値上げ案（一五〇〇円にする）を提出し、可決された。

一、その他事務報告

昭和四八年九月三〇日現在の会員数二八七名（内住所不明三名）。本年度の新入会員二一名。退会会員二一名。

一、昭和四九年度事務局

次期事務局を中央大学（島崎稔会員・田野崎昭夫会員・吉沢二郎会員）にお願いすることとし、島崎会員よりお引受けいただく旨の挨拶があった。

一、昭和四九年度大会当番校

次期大会当番校として東北大学（田原音和会員ほか）にお願いすることになり、田原会員からお引受けいただく旨の挨拶があった。

一、その他

（前事務局益田記）

△一九七三年度村落社会研究会決算報告▽

一九七二・一〇・一～一九七三・九・三〇

収入の部

前年度繰越金

四九、八三五円

会費収入(四八年度以前も含む)

四四五、四五〇

雑収入

一、五四六

計

四九六、八三一

支出の部

「研究通信」八四～八九号印刷費

一九三、八〇〇

その他印刷費

九、八〇〇

「研究通信」八四～八九号郵送費

八一、五三〇

通信・連絡費

二五、一六五

会議・会合費

一五、一四九

事務用品・消耗品費

二五、四九五

交通費

二、一一〇

計

三五三、〇五九

差引残高(次年度繰越)

一四三、七七二

第二一回村研大会会計報告

収入の部

宿泊費(会食費)

四〇〇、七〇〇円

大会参加費

三六、五〇〇円

懇親会費

五〇、四〇〇

補助金(愛知大学)

九三、二六七

計

五八〇、八六七

支出の部

宿泊費(会食費、諸費)

四二二、三八四円

懇親会等総費

七三、三三三

会場使用費

三四、五〇〇

大会アルバイト費

三五、四〇〇

文具費

一、九五〇

運搬費

五、二〇〇

現地交渉費

四、九〇〇

雑費

三、三〇〇

計

五八〇、八六七

編集委員会報告

一、年報第九集の刊行について

年報第九集は、十月に刊行されました。応募原稿の一部の提出がおくれたこともあって、刊行期日が例年より遅れ、大会前に会員のもとに届けることのできなかつた不手際をお詫びいたします。なお、紙価の上昇に加えて、一部の原稿に図表が多く、また校正の段階で大巾な加筆訂正などがあったため組代が高くなり、その結果予想以上に高い定価となりました。執筆要領等につ

いては、いずれ、編集委員会で再検討したいと思います。

。年報第九集・定価三、二〇〇円

。会員定価二、七〇〇円（郵送料を含む）

。入手方法・直接稿書房に代金を添えて申込んで下さい。

一、年報第一〇集の原稿募集について

すでに「研究通信」（八九号）にも掲載しましたように、年報第

一〇集の原稿を募集しています。申込の切期日は、本大会終了

までの期間です。応募される方は要旨（原稿用紙二、三枚）を添

えて委員に提出して下さい。なお、本原稿の枚数は、八〇枚・原稿

切は三月末日です。

一、調査研究叢書第三輯の刊行について

「研究通信」（八八号）でお知らせの通り黒崎八洲次良「近代農

業村落の成立と展開」が去る五月によりやく刊行されました。

。定価二、九〇〇円、会員定価二、五〇〇円（郵送料を含む）

。入手方法は年報の場合と同じ。

〒113 文京区本郷三丁目六一〇 稿書房

振替「東京八七八二」

なお、本研究叢書の刊行には、一、二輯同様に福武直会員より出版費について助成をいただきました。叢書が二刷になると印税収入があり、出版資金に繰り入れられることになっていますが、このようなルートによる資金プールの実現の見通しはいまのところない状況です。といつても個人のご好意に依存することと許されなれないと思います。継続して叢書を刊行するための資金の

検出方法について検討する時期にきていると思ひます。この点に

ついてのご意見を委員会に寄せて下さい。

以上
（編集委員会）

委員会記録

。第一回 合同委員会

一、期日 一〇月三十一日 正午より

一、場所 大会宿舎（ホステル合歓 食堂ティールーム）

一、出席者 島田、安孫子、田原、安原、蓮見、服部、高山、

吉沢、川本、高橋、牧野、余田、後藤、松本、原、

岩本、似田貝、島崎、中野、柿崎、（欠席、布施、

内山、中井、村長、内藤、小池、福武）

一、議題

(1) 第二二回研究大会の共通課題

川本委員より、各会員から提出されたアンケートの結果は、「本年度の大会課題の継続」三、「課題の継続だが変化をもたせる」一、「家」三、「現実分析」（過疎など）二、「方

法論」一、「自由報告」一であったと報告があり、討議の中では、継続を主張する委員（蓮見委員）に対し、民俗学を含む他分野の研究者が参加しやすいテーマに変更した方がよいの意見（川越、柿崎、原各委員）があり、そのために戦前の家の問題を設定せよの意見（中野委員）が出され、これと関

連して、「家・村落の内部組織に重点をおいて設定せよ」

(後藤委員)、「家の内部を扱う課題を『戦前の家と社会体制』としてはどうか」(島田委員)、「本年度課題の発展として家(近代原型の家)をとりあげよ」(田原委員)、「家を課題とするとき来年度を戦前の家とするなら、次年度は戦後の家を設定できないか」「家という課題を設定するとき、賃労働者化と家という視角で設定できないか」(安孫子委員)などの提言がありました。

本年度の課題への接近が経済的視角からなされていたことについて、「都市でも資本以外の問題がある」(松本委員)の指摘があり、また調査対象地が先進地帯に集中したことに ついて「先進地の事例だけでなく、後進地も対象とし、たとえば『過疎地域の再編成』、『二五万都市地域の農村』を設定できないか」(余田委員)などの発言があり、これらの諸意見を集約して、宿題委員がつめることにしました。

(ロ) 研究会のもち方

研究会はこれまでのように東京だけでなく地方でも開催することにし、今年度は大会をひきうけた東北大学を中心に、東北地方の研究者による研究会を最低一回は開催することに なりました。

(イ) 宿題委員会

運見委員より「都市と農村の対立V」という本年度課題の宿題委員としての任務が終了したので辞任したいとの申し出が

ありましたが、「家という課題を設定するにしても本年度の課題の発展としてみることでできるので、宿題委員は全員留任してもらい、もし課題によって補充が必要な場合は宿題委員で適任者を選び補充できるようにしました。

(二) 新事務局および次期大会当番校

四九年度の事務局は中央大学(島崎、田野崎、吉沢各会員)に、次期大会当番校は東北大学に決定しました。

。第二回合同委員会

一、期 日 十二月七日 午後五時半より

一、場 所 学生会館本館 三〇七号室

一、出席者 中野卓、高山隆三、高橋明善、柿崎京一、運見音彦、

安原茂、似田貝香門、益田明美(前事務局)、島崎稔、

田野崎昭夫、吉沢四郎、

一、議 題

(イ) 大会の共通課題について(宿題委員会)

運見委員より、四九年度大会の共通課題についての提案があり、これをめぐって熱心な討論がおこなわれました。(宿題委員会からの提案と討議の概要は前記参照)

(ロ) 年報第一〇集の編集、その他について(編集委員会)

柿崎委員より、(1)年報第一〇集の原稿応募者と論題が報告され、共通課題、自由報告、応募、依頼原稿を合わせて一〇編となるので、年報は頁数の関係から六編にしほる必要があり、個

個の論文についてはもう少し検討することになりました。ただし、依頼原稿、共通課題は優先することを決定しました。(2)第一〇集に掲載する研究動向の執筆者について柿崎委員より意見を求められ、いろいろな意見が出され、これらを参考にして編集委員が交渉することになりました。決定次第「通信」で会員の協力をよびかけることになりました。(3)村研年報第九集は図表が非常に多く、印刷コストが高くなったので、現在の出版事情から何んらかの自主規制が必要となり、柿崎委員が第一集から第九集までの原稿を詳細に検討した上で、「原稿執筆要領」を作成し、提案されました。合同委員会で検討の結果、ほぼ原案通り決定いたしました。この新しい執筆要領は、執筆される方に、柿崎編集委員からお送りすることになりました。

研究論文等の送附依頼について

去る十二月七日の編集委員会において、年報第一〇集の研究動向の執筆依頼者を決め、目下、本人の了解を求めべく交渉中ですが、既に「社会学」分野の執筆につきましては、余田通信会員の快諾をえております。「社会学」で取上げる論文は、昭和四八年一月より十二月まで発表されたものです。つきましては、この期間に発表された論文を余田会員の方へご送附下さるようお願いいたします。もし、現物のない場合には、コピーまたは掲載誌名・巻号・発行所等についてお知らせ下さい。また、他の方の論文などについてご推薦される場合にも右同様の要領でお願いします。

「社会学」分野の論文送附先

〒562 大阪府箕面市桜ヶ丘一―一四―二七

余田博通

編集委員会(柿崎)

会員動向

▽新入会員紹介

崔在律

全南大学校農科大学農業経済学科

大韓民国光州市龍鳳洞六四一

(電話 三一〇六六一)

佐藤常雄

東京教育大学農学部大学院

〒164 東京都中野区中央二―五三―一四 みのり荘

(電話 〇三―三六九―一七三〇)

高木正朗

慶応義塾大学大学院

〒213 川崎市高津区宮崎一七三 第三さつき荘

千葉修

東北大学大学院

〒980 仙台市大町二―五―一〇 銀麿荘アパート

(電話 〇二二二―二二―五八二五呼)



▽住所変更

鳥越皓之

〒186 小金井市前原五・八・一五

小金井ハイム三〇二号

蓮見音彦

〒175 東京都板橋区高島平五・三九一四

(電話) 〇三一九七五・一四〇八)

社会調査の「比較社会学」的考察

田野崎 昭 夫

一昨年滞米していた時、ハーヴァード大学で大学院のコミュニティのセミナーに出席させてもらった。単位をとるわけでもなくオプザーバーとして出ていたのだが、そのきわめて熱心な雰囲気ひかれ御礼に何かペーパーを作って皆に進呈しないと申しわけないよう気がしてきた。幸いエンチン東洋文献図書館に以前に発表した「釜石調査」(社会学研究一七号)が収蔵されているのをみつけた。そこでこれを、調査時点以後の変化四項目ほどをもちこんで図表ともタイプ用紙三〇枚ほどに英文で要約して皆に配り、余った分をお世話になった諸先生にも差上げたところ、ベル教授をはじめ多くの方から大へん面白かったとほめて頂き、ほっと胸をなでおろした次第であった。ただその際、感じた点が二つほどあった。

一つは調査対象(地)を実名で公刊報告書にのせていることを、かれらが興味深く感じていることであった。よく文句を言われない

ですむものだ、何かうまい方法でもとっているのか、と言いたげであった。アメリカではコミュニティ調査は大体架空の地名で刊行されている。たとえばウォーナーのヤンキーシティはマサチューセツ州北部のノーベリポートという海岸町であるし、リンドのミドルタウンはインディアナ州のマンシーであり、ウエストのブレンヴィルも仮名である。個人のフライバシーや地域社会の共同の名誉に対する配慮によるものであろうが、むしろわれわれはその背後に調査倫理と調査戦略の問題を感じる。あまりに批判的な態度で調査に取組めば警戒され拒否されることがあろうし、また迎台的な態度では科学的な成果は得られ難いであろう。戦後の当座なんでも民主化の時代で農村調査もこれを大義名分として調査できた時期は過ぎているし、好专家的な調査では十分な組織的な成果は難しいであろう。農村が抱えている問題に農民の立場にたって取組む態度こそが大切なのであろうが、そこでも調査対象内に集団的または階級的対立が強い場合はやはり困難と限界がつきまとうであろう。アメリカでもヴィディチとペンズマンがニューヨーク州のイサカの農村コミュニティを調査して「大衆社会における田舎町」を著したが、スプリングデールという仮名を用いたにもかかわらず批判的な分析だったため地元民の抗議を買ひ、ついに住民は両名の人形を作って焼くという事態にまで発展したことがある。その後両名が中心となって地域調査に関する諸問題を取りあげ論集「コミュニティ研究の反省」を刊行している。

第二に感じたことは、日本人が日本のコミュニティを調査したモ

ノグラフが意外に外国に知られていないということである。日本人の書いたものは概説的なものや日本社会全体を扱ったものが大部分であって、英文での生のモノグラフはまず見当たらない。却ってエンプリー「須恵村」、ドーア「都市の日本人」、ボーゲル「日本の新中間階級」といった外人のものが目立つのである。だからごく簡単にペーパーであったにもかかわらず、われわれのモノグラフを珍重してくれたのかもしれない。それで思い出されるのは、ボーゲル氏に日本研究から中国研究に重点を移行させた理由を訊ねたところ、日本語が少しわかるようになって日本へ行ってみたら、日本における日本社会の社会学的研究は非常にすぐれたものが沢山あることを知って外人の研究する余地はなく、これに対して中国では中国人自身の中国社会学研究が少ないからである、と説明してくれたことである。逆に見れば、外国の日本社会学研究は概説的なもの二次的なものではもはや満足しないほど進んでいて、しかも言語の事情のため生の資料やモノグラフに飢えているのである。この意味でわが国はいまや社会学研究の輸入だけでなく輸出の時代にきているのであるが、それは外人観光客向けに作られたみやげ品ではなくて本格的な研究者のための本格的な輸出品でなければならぬのである。しかし現在のところでは、せめてエッセンスを圧縮したものでもよいから村研各会員のすぐれた業績が海外に紹介されるならば、日本の学問的水準が国際的にもっと評価されるであらうと確信するのである。

Ⅹ

事務局長 短信

◎ 石油不足、紙不足、そして生活破壊的なインフレーションといふなかで、事務局をおおせつかり、責任の重大さを痛感しております。会員の皆様のあたたかい御協力をお願いします。

◎ 事務局の連絡先は左記の通りです。

東京都千代田区神田駿河台三一九(千一〇二)

中央大学文学部社会学研究室 島崎 稔

(電話) 〇三一二九二一三一 内線四六七)

なお年末年始など休暇のため緊急にご連絡いただくのには大
学は不便ですので、そのような場合は左記に願います。

東京都新宿区中新宿三一一一四

島崎 稔 (電話) 〇三一九五一 一六三四)

◎ 研究通信第九〇号の発刊が大変おそくなりおわびいたします。

◎ いつものことで、会費納入をよろしく願います。納入の方法はつぎのうちいずれかにお願ひします。

一、郵便振替 口座番号 東京八〇二二七 村落社会学研究会

一、銀行払込 太陽神戸銀行桜上水支店

口座番号 一五三一 一六八四五 村落社会学研究会

代表者 吉沢四郎

一、現金書留 東京都千代田区神田駿河台三一九(千一〇二)

中央大学文学部社会学研究室 島崎 稔